

(一) 光蓮寺 (福山市神辺町川南)

光蓮寺は山号が薬上山と号する浄土真宗の寺院である。文化四年(一八〇七)の神辺大火にも難を逃れ、本堂内には天井絵や壁画が描かれ当時の姿を遺している。また、二十七畳敷の客殿があり「雨嘯園」と名付けていたという。しかし、現存していない。



光蓮寺本堂



本堂内の天井絵



本堂内の壁画

一 光蓮寺の縁起

「福山市神辺歴史民族資料館・神辺の寺院」によれば

寺伝によれば、元は現在より南の山麓(現福山市神辺町川南の丁から長畑にかけて)にあり、「浄源寺(じょうげんじ)」と称する天台宗でしたが、その後、浄土真宗へ改宗し、さらに一時期真言宗を経て文禄元(一五九二)年に浄土真宗に戻ったといわれています。寛永年間(一六二四〜一六四三年)現在の場所に移り、寺名を「光蓮寺」に改称しました。元の場所には今も飛び地を有し、当時の名残を見ることができます。また、福山藩主・水野勝成により拠点が福山に移されると、神辺城下に付随した建物の残材を譲り受け、庫裏などの建立に使用したと伝えられています。菅茶山編纂の「福山志料」には、「光蓮寺は了波(りょうは)が寛永年間の頃、今の場所に移す。古くは祐佳山・浄玄寺といい、伝教大師・最澄の弟子・徳応(とくおう)が開山した天台宗であった。十世・行圓(ぎょうえん)の時に真言宗に改宗。それより九代後の了明(りょうめい)の時、存覚(ぞんかく)上人が来て教えを広めたため、よって存覚を開基とする。了明より今の宗(浄土真宗)となり、了波の時に今の名(光蓮寺)に改めた。」と記されています。

ここでは寺伝の旧寺名「浄源寺」を別字を使い「浄玄寺」とし、さらに「西備名区」では経緯はほぼ同じですが「浄立寺」と別名で記しています。

文化四(一八〇七)年の神辺大火の際には寸前で鎮火し、難を逃れたといわれています。

とあり、水野勝成が福山城築城の際、神辺から多くの寺院が福山に移転させられている。その跡地に移転してくる寺院もあり、光蓮寺も町はずれから十日市通りに移転していることがわかる。

二 鳳靈上人について

光蓮寺住職の中で特筆すべき上人は、鳳靈上人であろう。

名は靈昌、南涯と号す。鳳靈は字にして、玄々堂・玄々亭の別号がある。茶山が「十四日與嶺松師赴輛浦途中口占」(後述)と詠んだ詩があるので、「嶺松」とも称したのではないか。

鳳靈は延享二年(一七四五)光蓮寺第五世閑嶺の子として生まれ、文化三年(一八〇六)京都

で病没。六十二歳であった。

妻は金丸村光秀寺祖隨の二女於麻津で八子を儲ける。二男恵剛（名千熊、号南岸）が跡を継ぐ。鳳靈上人は茶山より三歳上で、家族ぐるみで付き合ひであった。さらに、茶山の師・友である西山拙齋も茶山と共によく光蓮寺を訪ねている。

茶山は鳳靈上人について、福山志料の中で（上巻 卷之十、九頁）

僧風靈 鳳靈マタ靈昌トモ云、神邊光蓮寺先住也、高屋川年々沙淤（しやお）シ、平生水スクナク、霖雨ニハ漲溢ハヤク、數村ノ害トナルコト、追々マサリユクヲミテ、己ヲ信スル輩ヲアツメテ、農隙ニ疏浚セシム、此ヲモテ寛政十年賞金三百匹ヲ賜ハル。

此の僧少年多病ニテ、父老嬉遊ノ事ヲス、ム、因つて賭博にフケル、後ニ折節讀書、其宗正傍ニ依ノ書ノミナラス、カネテ詩歌ニモ及フ。播州ニ智暹ト云僧アリ、宗旨ヲ争フテ、所見ヲ正義ト唱フ、鳳靈ソノ羽翼ノ一也。近頃又新義を唱フルモノアリ、衆僧雲ノ如クシタカエトモ、鳳靈ヒトリ肯セス。晩年讒言ニカ、リ本寺ニ呼上サレテ、一室ニ幽セラル、ナヲ己カ所見ヲ確執シテエ屈セス、終ニ病テ逆旅ニシス、守ル所アリト云ヘシ。詩歌稿ナシ、人ノシタルヲ記ス。

と記している。それによると

- 鳳靈は農民たちを説いて、高屋川の浚渫事業を行い、藩主から褒美をもらっている。
 - 幼少のころは病弱で、一時期に賭博にも手を出し遊んでいたが、書や詩歌に秀でていた。
 - 播州の僧智暹（ちせん）に学んだ。智暹と本山の僧侶間での論争では、鳳靈はその一翼を担った。
 - 「新義」についての論争で、本山に訴えられたが、所見を曲げなかつたので幽閉されて病死した。
 - 鳳靈の詩歌は知らない
- の五点である。それぞれを少し詳しく述べる。

① 「高屋川浚渫事業について」

神辺地域の河川は、堂々川にみられるように洪水時には多くの土砂を流した。寛文十三年（一六七三）大原池が決壊し、死者六十三名を出し、国分寺も壊滅的な被害を受けている。

一七〇〇年代に入ると、藩は対策として砂留の築造に取り組み始める。高屋川も堂々川や箱田川等の支流から流れ込む多量の土砂で底が周りの田畑よりも高くなる天井川であった。大雨時にはさらに大量の土砂が流れこみ、堤防の決壊や堤防から水があふれる等で、度々被害が出ていた。記録では、寛政元年、同三年、同四年、同七年（一七八九〜一七九五）に洪水があったと言う。高屋川の底にたまる土砂の撤去、すなわち浚渫の必要性があった。鳳靈はその必要性を福山藩や農民たちに説いて回り、工事を進める推進役になったのである。その褒美として、寛政十年（一七九八）、藩主阿部正倫から金三百匹を下賜された。

② 「幼少時は病弱。賭博にも手を出し遊んでいたが、後に学問し、書や詩歌に秀でた。」

この内容は、茶山が藩に提出した「郷塾取立に関する書簡」にある「神辺と申処ことの外悪風俗之処にて、村にて歴々など申てはかまきありき候人までみな博徒ニ候、われもあやします、人もゆるし、親戚も見のかし候故、わたくしなどもはたち計迄ハはくちもうち富第一をもちよい候ほと二候へハ・・・（後略）」とよく似た内容である。鳳靈も心機一転、学問し詩歌にも長ずることになったと述べている。

③ 「播州の僧智暹（ちせん）に学んだ。智暹と本山の僧侶間での論争では、智暹の理論構成の一翼を担った。後年、鳳靈も本山学林派と対立し本山に呼び出され。「異安心」として、糾問され京都で病死する」

め、さらに天台、俱舎、唯識などを修めた。師の智暹は、当時眞宗三学僧の一人であったが、本願寺学林派と相いれないものがあり、本山と対立した。本願寺は明和四年（一七六七）智暹を京都に召致し糾弾した。智暹は幽閉され病没した。福山志料に「鳳靈ソノ羽翼ノ一也」とあり、論争の一翼を担っていたのではと推測される。しかし、その故に、鳳靈は本山学林派から異端視されるようになったのである。

④ 「本山学林派の系統に属する石見の国淨泉寺の履善が唱えた「新義」に反対し本山に召致されたが節を曲げなかった。病を得て京都で没する」

「新義」とは、神道の徹底的な排斥と、墳墓を不用とする説であったらしいが、これを鳳靈は眞宗の本義に反するものとして強く論難攻撃した。鳳靈は「異安心」を唱えるものとして、履善らによって本願寺に訴えられ、文化元年京都に呼ばれ、本願寺の役僧たちによって糾問されたが、持論を主張すること三百余日、遂に病を得て、文化二年（一八〇五）京都市内の逆旅（旅先の宿）で病を養っていたが、文化三年九月、六十二歳で没した。鳳靈の遺骸は京都にて茶毘に付され、光蓮寺に葬られた。

⑤ 茶山は『福山志料』では、鳳靈の詩歌を認めず、他の人が紹介した作品を記載している。

應二三子請講梵值中秋月佳轍事同賞			
中秋把酒對前除	月照蕉窓祿欲虛	喜見無邊光裏客	醉談猶及梵文書
寒下			
漢家飛將破胡時	百戰沙場身未疲	誰料今霄陣中笛	無端吹起故園思
池月			
さゝ波のよるとも見えず池水の	心しつかにすめるつきかけ		

この他にもう一首の和歌が光蓮寺には残されており紹介する

閑居雪	
柴の戸のをりをり人のとひこしも	雪にたへたる苔のかよひ路

三 茶山と鳳靈上人の関係について

茶山と鳳靈は年齢も近かったこともあり、度々訪問しあったり吟遊に出かけている。茶山日記には、鳳靈没後も家族ぐるみで付き合っていたことが記されている。（付録 茶山日記参照）遊研岩記に「安永七年、靈昌・惠充上人、桑田元厚らと国分寺裏山に登る」とある。また、月見にも一緒に出掛けたのであろう。光蓮寺境内に次の石碑が建っている。

十四日與嶺松師赴鞆浦途中口占	黃葉夕陽村舍詩	前編	卷一
十四日嶺松師と鞆の浦に赴く途中口占す			
牛渚清遊久有期	牛渚（ぎゅうしよ）の清遊（せいゆう）	久しく期有り	
忽乘新霽試筇枝	忽（たちま）ち 新霽（しんせい）	乗じて筇枝（きょうし）を試みん	
喜看遠嶺生霞彩	喜び見る遠嶺霞彩（えんれいかさい）	の生ずるを	
明夜陰晴已可知	明夜（みょうや）陰晴（いんせい）	已（すで）に知る可（べ）し	

口占 口ずさむ。牛渚 揚子江の月の名所、ここでは鞆浦での月見。
霽くはれる、雨や雪が止む。筇 竹の杖。明夜陰晴 明日曇るか晴
れるかはつきりしていて、この分なら晴れるに決まっているの意

(大意) 鞆の浦で清遊(月見)をすることは以前からの約束で期待してい
た。急に天気も晴れたので杖について探勝することにした。遠くの
山に美しいもやがかかっている。眺めは格別だ。これなら、明日
十五夜の晴天はもう決まったようなものだ。



本堂前の石碑

題龜井道載災後所畫竹應僧惠剛需 黄葉夕陽村舍詩 前編 卷六

龜井道載、災以後 竹を画く 僧惠剛の需むる所に題す

直節由来取人疑	直節 由来人の疑いを取る
虚心底事到天災	虚心底事(なにごと)ぞ 天災を到す
庠覺列屋誰蒙葺	庠覺(しようこう)列屋 誰が蒙葺(もうしゅう)
經史充棟空燼灰	經史棟に充ちて 空しく燼灰(じんかい)
頼有兎毫燒未盡	頼(さいわい)に 兎毫(とこう)の焼けて 未だ尽きざる有り
時時畫竹佐舉杯	時々 竹を描いて舉杯(きよはい)を佐(たす)く

直節 まっすぐで自分の心を固く守って曲げないこと。 庠覺 学校。 蒙葺 屋根をふく。
兎毫 筆。 佐 たすく。

(大意) 正直一徹は何時の世も人の疑いを招く。しかし、あの無欲な清廉の人が、どうして天の
災を受けたのか。その学舎や別屋と多くの棟があったと言うが、誰が屋根をふいたのだろ
う。棟いっぱいにつまっていた経書や史書が空しく灰になったという。ところが幸いに筆
は焼けないで残ったとみえて、時折竹を描いて杯を挙げる代にしている。

* 龜井道載は九州の学者で、茶山の友人。九州一の塾をつくる。道載が火災にあった後、竹を
描いたものに、僧惠剛(鳳靈の子、光蓮寺住職)の求めによって茶山の題したもの。

【ちよつと休憩一】漢詩「十四日與嶺松師赴鞆浦途中口占」の詩について

某氏から「茶山の詩を正しく読んでいない」と教えられた。先輩たちの著した書籍を調べてみる
と、承句(二句)末の一字を「杖」とするものと「枝」とするものがあった。どちらが正しいのか
検討するには、「漢詩では韻を踏むことを大切にしているので、韻から調べる必要がある」と。
韻について調べてみると、

漢詩では、韻を踏むことが決められている。詩の中で一定の音をきまった位置にくり返して用い、
音調を美しくとのえること。「韻をふむ」ともいう。漢詩や西洋の詩には古くから押韻のきまり
があった。頭韻(句の頭の字に押韻する)と脚韻(句の末尾の字に押韻する)がある。漢詩の五
言絶句では、二・四句末に(一句末にすることもある)。七言絶句では一・二・四句末に押韻する
などのきまりがある。七言律詩なら一・二・四・六・八句の最後の字)が同じ響きを持つ。

と説明されている。この詩は七言絶句で一・二・四句で韻を踏むことになる。

牛渚清遊久有期	↓キ・ゴ	qi
忽乘新霽試筇杖	↓チヨウ、ジヨウ	zhang
喜看遠嶺生霞彩		
明月陰晴已可知	↓チ	zhi

(黄葉夕陽村舎詩復刻版)	
乘 _レ 新 _レ 霽 _レ 試 _レ 筇 _レ 杖	
杖↓シ	zhi

「杖」では韻が踏めないことになる。では、「黄葉夕陽村舎詩」ではどうなっているのか、復刻版を見てみると、右下図で「杖」ではなく「枝」と読むべきであるとわかる。

【ちよつと休憩二】 茶山と履善の関係について

「題義仲墓詩後」(「黄葉夕陽村舎文」卷之四所収)に

安永元年（一七七二）西山拙齋らと近江の国の義仲寺に赴いたとき、石燈に履善の詩を見て、その聲調の美しいのに感心して、それに次韻した詩を側に書いておいた。履善はこの事を聞いたらしく、十数年後に、茶山に次韻した詩を見せてほしいと言ってきた。しかし、茶山の詩は即興の作で忘れていたが、履善が義仲寺の石燈に題した詩を知らせてきたので思い出した。しかし、放置していたが、讃岐の意戒上人が来談して、この事に話が及んだので、履善に寄示した。茶山は「首を當初に回らせば、荏苒（じんぜん）四十餘年なり矣」（抜粋、原文は漢文）

と文政二年（一八一九）に記している。

この履善は鳳靈を「異安心」として本山に訴え、京都で逆宿させた人物である。茶山と鳳靈の関係は先にも述べたが、旧知の中であり詩友でもある。義仲寺での次韻した時には、履善については知らなかったが、天明年間に起きた「新義」論争では、その中心人物ある履善について聞いていたはずである。

履善から詩を送ってほしいと依頼されたのが、義仲寺から十数年後なら、「新義」論争中であるから、詩を忘れたことにしていたのでは。さらに、履善から石燈の詩を送ってきてやっと思いだしたが放置しておいた。次韻の詩を送ったのは、鳳靈没後十三年後であり、意戒上人との話の中で、送る気になったのである。義仲寺から四十数年後であるという。

茶山日記の中には、「文化二年（一八〇五）七月五日 光蓮上人赴本凡寺來別」さらに「文化三年九月十四日 京都御前通西洞院東佛師畑治郎右衛門宅で病没」と記している。茶山は鳳靈上人がなぜ本山に行くのか、どうして亡くなったのかなどを知っていたはずである。茶山の履善に対する思いを知ることができないが、奇しき因縁である。

四 靈昌上人と西山拙齋の関係について

明和八年（一七七二）西山拙齋が茶山を訪ね、三原で看梅をして以来、茶山は拙齋を師として、友として互いに訪ね会っている。拙齋は、廉塾を訪ねた折には、国分寺、遍照寺、西福寺、龍泉寺、河相君推宅などにも度々同行したことが茶山日記に残されている。

「菅茶山年表」（菅茶山記念館）の中に「天明五年三月二十二日 頼杏坪・西山拙齋・姫井桃源と光蓮寺靈昌を訪ねる」とあり、彼らは例によって、題を分け合って詩を詠じている。

そのうち西山拙齋が作った詩が「拙齋西山先生詩鈔」中巻に「光蓮寺靈昌上人見招席上分雨嘯園十題余得彩霓橋」と題して収められている

鑑流橋幾尺	流れに鑑す 橋幾尺ぞ	
架此瑤池水	此の瑤池(ようち)の水に架す	*瑤池 美しい池
閑踏彩霓過	閑に彩霓(さいげい)を踏みて過ぐれば	*彩霓 虹。ここでは橋の名
諸天知在邇	諸天 知んぬ 邇(ちか)きに在るを	

光蓮寺にはかつては「雨嘯園」という客殿があったと先に述べたが、その「雨嘯園」で詠んだのであろう。「雨嘯園十題」というのは、「雨嘯園十景」を撰んで、これを詩の題にして詩を詠んだのである。この時、西山拙齋は「彩霓橋」が当たったのである。拙齋はもう一篇の詩を詠んでいる

即事呈靈昌上人 福山志料 卷之十五	
鳥啼花樹晚離披	鳥啼いて花樹晚(おそ)く離披(りひ)す *離披 花が十分開くこと
雨嘯園中雨霽時	雨嘯(うそぶ)いて園中 雨霽(は)るる時
想得去年今日宴	想い得たり 去年今日の宴 *韶景 春ののどかな景色
依然韶景對吟卮	依然たる韶景(しょうけい) 吟卮(ぎんし)に對す *卮 さかずき

「去年今日宴」とあるように、一年前の同じ日の詩宴を思いだして詠んだのであろう。

【付録】茶山日記等の中にみられる靈昌上人・光蓮寺についての記述

靈昌上人(光蓮寺)とは、家族ぐるみの付き合いであったこともわかる

年号	西暦	内 容	注
安永 七年	一七七八	9/9 靈昌・惠充上人、桑田元厚らと国分寺裏山に登る(遊研岩記)	*は筆者の補足説明
天明 二年	一七八二	「十四日與嶺松師赴頼浦途中口占」の詩を詠む	
四年	一七八四	3/22 拙齋・晋宝(弟恥庵の名)と共に光蓮寺南涯上人に招かれる	
五年	一七八五	3/22 光蓮寺の靈昌上人に招かれる	
寛政 八年	一七九八	藩主正倫より高屋川治水の功績で金三百匹下賜される	
十二年	一八〇〇	7/18 会陽之進葬于光蓮寺	
享和 二年	一八〇二	12/5 訪左市兄弟 引野屋 角屋 士晦 光蓮	
三年	一八〇三	4/1 上光蓮寺 看屏風	
		12/11 光蓮寺及藤屋にたる	
文化 二年	一八〇五	7/5 光蓮上人赴本凡寺来別	
三年	一八〇六	7/6 饒光蓮上人以烟草及二字扇	
五年	一八〇八	9/14 靈昌上人、京都御前通西洞院東仏師畑治郎右衛門宅で病没	
七年	一八一〇	4/23 光蓮寺恵紅魚二 一以餽塾生 一以餽余 *紅魚 鯛	
		4/3 光蓮・泰蔵恵大紅魚 *泰蔵 娘於麻知の夫	
		8/26 光蓮招飲 拉礼司同赴 礼司論詩可聴	
		8/28 恵剛恵豆苗 *恵剛 靈昌後の光蓮寺住職	
八年	一八一 一	5/1 恵剛上人来謀身事	
九年	一八一 二	5/5 万念和尚 円兵衛 光蓮兄弟(恵剛と順導力)来	
		9/9 光蓮上人携高居(たかあ)寺来 *高居寺 浄土真宗 西中条川西 元禄の頃現在地へ	

十年	一八一三	4/1	江原亡母七日会 元助・亀吉・光蓮・桂蔵 各恵紅魚
十三年	一八一六	4/18	光蓮上人恵紅魚
		4/22	恵剛上人掬花西福寺 乞余看之 *掬 両手で花をすくう
		5/20	托光蓮寺 造竹瓶四分三送北条 留一於塾 * 北条 北条霞亭
		8/29	使堯佐会葬林氏祖母于光蓮寺
文政三年	一八一〇	10/24	光蓮寺来話
五年	一八一二	2/23	光蓮主人来 戒二十六日往看花 *戒 つげる
		2/26	赴光蓮寺看花 内亦往
		12/30	光蓮上人 林泰蔵各有恵
八年	一八一五	4/24	光蓮寺内人来応吉十招也 於教(敬)・於閑(静)接伴 内(宣)後往
		5/8	光蓮寺恵紙・酒
		10/5	光蓮寺恵土宜 タニサクカケ・ビンツケ *土宜 土産
		11/28	光蓮内 恵山芋
文政九年	一八二六	3/14	光蓮寺内人来 戒十六日妻婦姪女同往 賞庭櫻
		3/15	於敬・於静赴 光蓮寺招
		5/2	招光蓮・北山及近隣諸婦人於新宅 光蓮婦人恵魚・酒及数品
		5/9	暁内属紘(妻宣 没)
		8/22	於敬及静弔新九郎母及光蓮寺 *新九郎昨日 没
		8/29	帰路弔光蓮・林家二家 *新九郎 泰蔵の子 大和へ同行する
		10/27	妹種・於敬赴光蓮寺招

参考文献

- 僧風靈(一)〜(六) 猪原薫一 備後史談四〜五卷
- 福山志料 上・下巻 芸備郷土誌刊行会
- 神辺歴史文化ガイドブック 神辺学区まちづくり推進委員会
- 黄葉夕陽村舎詩 復刻版 児島書店
- 茶山詩話 菅茶山遺芳顕彰会
- 菅茶山年表 菅茶山記念館
- 光蓮寺縁起 浄土真宗本願寺派光蓮寺